

Title	私の死生観，臨老での研究，そして現在
Author(s)	尾崎，勝彦
Citation	生老病死の行動科学. 2019, 23, p. 25-26
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/73617
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

私の死生観, 臨老での研究, そして現在

My attitude toward death ,student studies and now

(フリーランス) 尾崎 勝彦

(Freelance) Katsuhiko Osaki

1. はじめに—フリーランスとしてのエクスキューズ

私は、'99年に学部編入学し、'07年に博士後期修了、その後1年間技術補佐員と言う形で臨老にお世話になりました。今でこそ、中高年の学生は珍しくはありませんが、臨老の中高年学生の第1号でした。臨老を卒業・修了された諸先輩方、および後輩のみなさまは社会のそれぞれの分野で、活躍されていることと思います。ところが私は臨老修了生で定職にも就いていない(厳密には就けていない)おそらく唯一のOBかと思われます。そんな私が寄稿などおこがましい限りですが、こんな先輩もいる、こんな(年上の)後輩もいる、と生涯学習論的な1つのエピソードとして見ていただければ幸いです。

2. 臨老に入る前, 入るきっかけ

中高年学生と述べましたが、臨老に入るまでは鉄鋼メーカーでエンジニアをしておりました。鉄鋼に興味があったわけでもなく、国家・社会を支える、という使命感があったわけでもなく、「なんとなく」就職しました。当時は大学を出ていればなんとなく就職できる時代でした。それで、なんとなく仕事をしていましたが、バブル崩壊後「なんとなく」、が通じなくなり、非常に厳しい状況に置かれ、私はうつを発症してしまいました。うつを発症すると、幼少の頃(死の概念を獲得して)から、時折苛まれていた死の不安発作に頻繁に襲われる様になりました。私の死の不安は、死に様子が怖い、とか、死後のことが心配だ、というようなものではなく、死ぬ事によって意識・自我が永遠に失われてしまう事に対する恐れでした(厳密には現在形で、恐れです)。怪我や病気で辛い思いをした、とか、悲惨な死を目の当たりにしたという経験はなく、将来必ず死ぬ事が分かっているのに、自分が死んでいる未来の話はとて

も恐ろしかった事を覚えています。1967年放映のリボンの騎士のエンディングの、♪千年万年百万年リボンで繋ごう1億年、と言う歌詞、1970年の万博は松下館の5000年後に開けるタイムカプセル、1973年中学1年ときの理科の授業(太陽の赤色巨星化による地球滅亡、50億年後のことです)等です。うつになりその恐怖が頻繁に襲ってきたものですから、それならば怖い死に関する勉強をしよう、と思い、編入学試験を経て臨老に入れていただいた次第です。職業の一貫としての入学ではなく(鉄鋼材料の研究と臨老の研究はまず接点はないでしょう)、職を辞しての入学でしたので、面接時には柏木先生が、妻のことを心配してくださいました。

3. 臨老時代の研究

「死が怖い」という思いで入った臨老ですので、学部時代は、人は、人が死ぬ事をどのように捉えているかということ調べました。具体的には、がんで亡くなる人のドキュメンタリーを見せ、その前後での気分状態の変化を調べました。その後、院に進学してからも、この研究は死の臨床研究会から助成金をいただいて、修論とは別に行いました。と、ここまでは名実共に死生学らしい研究をしていたのですが、修論は「自然観」をテーマとし、自然観と死生観の関連を調べました。修論は一応死生観が入っているので、死生学の研究に見えます。博論では、自然接触行動の研究を行いました。具体的には森林散策者や、天体観望者を調査対象とし、森林や天文台に頻繁に調査に行っておりました。こうなると体裁上死生学の研究には見えなくなりますが、その動機付けはとて死生学らしいものであると私は思っています。

ホスピスのガーデンの小さな自然が患者や家族を

和ませている事、柏木先生の事例で、患者に弘前の桜を見せに行った事、淀川を見て患者が満足した事、などから自然の持つ力に着目し始めました。何よりも私自身がアポトーシスの存在を知り、死の肯定的な側面、生と共にある死を知ったこと、そして博論の前文にも引用している文言－人間は他の哺乳動物とは違って自分が死ぬ運命にあることをはっきりと自覚し、死を恐れている。しかし宇宙の研究は、時間を超越した感覚や、自分はより大きなものの一部であるという気持ちを与えてくれる。自分が進化する宇宙という永遠に展開するドラマの一部であると知れば、自らの命に限りがあるという事実の恐ろしさが軽減される－(Ramachandran, V. S. & Blakeslee, S., 2000) が私の研究方向に大きな影響を与えました。

4. そして現在

後期過程終了後、しばらくは就職しようという気持ちは持っていたものの、そのうちにそういった気持ちも失せてしまいました。考えてみれば臨老時代から、グループ研究には加わず、ひとりで好き勝手にやっていました。また、そのことを柏木先生、藤田先生が許してくださっていました。また、会社員時代のうつ体験により、組織に所属することへの怖さもあります。もちろんたいした業績がないという事もありますが、現在まで非常勤生活を送っています。大学5校、専門学校4校で、心理系、環境系等の授業を担当しています。多い日は5コマ/日、または3箇所/日掛け持ちしています。実質肉体労働なので、授業が終わり帰宅するとさわやかな充実感と疲労感があるのですが、翌日の授業準備があるので、それには浸ってられない、と言うのが専らの悩みです。

社会活動としては、博論での研究・人脈を元にホスピス病棟での観望会や、福祉施設での観望会を開催しています。これらの成果は死の臨床研究会や科学教育学会で何回か発表しています。また、地元でサイエンスカフェを運営しています。サイエンスカフェとは、ゲストスピーカーと呼ばれる科学者・技術者等の専門家を喫茶店等に招き、飲み物片手にお気軽に科学や技術の話題を楽しむ専門家－市民間、また市民間のコミュニケーションの場です。臨老関

係では、坂口さんや権藤先生、後輩の辻本耐さんにゲストスピーカーをしていただきました。私のサイエンスカフェ観は、上記 Ramachandran らの言葉の「宇宙」を「自然」に置換したものです。すなわち死の不安を低減するの一つの手段です。自然を効率よく確実に知るための手段が科学であり、自然をよりよく知る事で、自然の中における我々の位置付け、存在する意味が深められると考えています。もちろん、専門家と市民の間には圧倒的な知識量の差がありますが、そういった意味においては専門家、市民を問わずフラットに話し合っていけるでしょう。仕事柄医療者や福祉者との付き合いが多いのですが、彼らは世の中は人間だけでできているというように考えているように思われます。彼らの明日の仕事には直接は役立たないでしょうが、自然の中の人間、自然の精緻なメカニズムによって生かされている人間という認識を持ってもらえれば、と思っています。

5. おわりに－藤田先生のこと

臨老在籍9年間のうち、5年間を藤田先生の指導の下に過ごしました。あまり出来の良くない私の博論を懇切丁寧に見てくださったことは言うまでもありません。学位取得後、比較行動の研究员になる予定だったのですが、それが突然年齢制限で不可となったとき、藤田先生と比較行動の中道先生が本気になって怒り、当局と掛け合い、技術補佐員の職を与えてくださいました。また、ご自身の定年退職後、先生の奉職されている大学に来ないかと誘って頂いたのですが、理事長面接でしくじってしまいました。この件に関しては、本当に藤田先生に申し訳なく思っています。恩を仇で返すとはこのことです。藤田先生にはいくら感謝してもし尽くすことができませんが、感謝できなくなってしまいました。心よりご冥福を祈るばかりです。

引用文献

- Ramachandran, V. S., & Blakeslee, S. (1998). *Phantoms in the brain: probing the mysteries of the human mind*. pp206 (山下篤子 (訳) (2000). 脳の中の幽霊 角川書店).